

# 戦後京都の出版と文化

今西 一 (大阪大学招へい教授・  
小樽商科大学名誉教授)



はじめに

今年、出版界を描いたテレビのドラマが多い。コミック業界を舞台にした、黒木華主演のTBSドラマ「重版出来(しゅつたい)」や「暮らしたの手帖」の創業者大橋鎮子をモデルにした、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」が好評であった。それに比べると石原さとみ主演の日テレ「地味にすごい!校閲ガール」は、視聴率は取れているが、話が非現実的だというネットの書き込みが増えてきて「打ち切り」が噂されている。

いずれのドラマも女性が主人公である。一昔前なら「暮らしたの手帖」と言えば、「天才編集者」と言われた花森安治を主人公にするのだろうが、今は戦中・戦後を生きた女性の苦難を描いた方が、圧倒的に主婦層に受けるようである。もともとNHKの朝ドラは、女性の主人公がほとんどである。

しかし、出版業界のドラマは増えても現実の出版社は大変な危機である。若者の活字離れが進み、デジタルデバイス普及によってメディアの多様化が進んでいる。二〇一五年の出版物の販売額が、一一年連続で前年を割り込

み(一兆五二二〇億円、前年比五・三%減)出版社の倒産は三八件と増加している。一般企業の倒産件数が、七年連続減少しているのに、出版業界は「不況型倒産」に見舞われている。京都の「出版クライシス」については、現在、『京都新聞』に特集記事が連載中である。

政府が日本の出版業(文化)を守る気のないのは、在庫品に税金をかけていることが象徴的である。そこで出版社は、再販制によって禁止されている安売りをするか、本を裁断するしかなくなってくる。安売りを続けられ、再販制が維持できなくなり、「本を殺す」裁断が増えていく。そのため学術書などは、最初から高価格で一〇〇〇部もいかない印刷になる。しかし、大学や図書館も予算がなくて、学術書どころか一般の本さえ買えない状況である。出版文化が衰退していくのは、現在の世界で進展している「反知性主義」を増大させるだけである。

戦後の日本は貧しかったが、「知識」には飢えていた。作家の五木寛之は、「若者が貧しいというが、ギリシャの古典でも、ドイツの哲学書でも、古本屋で一〇〇円で購入するならば、有難い時代ですよ」とテレビで語っていたが、これも一面的な見方である。確かに、若

き日の五木は、神社の境内で野宿同様の暮らしをしたり、血を売って食事にありついたり、壮絶な生活をしている。私たちの中学時代でも、本の立ち読みが流行って、何時間できるか競争したものである。

しかし、現在の非正規雇用の多さは異常である。昨年、ついに雇傭統計で、全雇傭者の四割が非正規雇傭になり、一五歳から二四歳の若年労働では、五割を突破している。若者は、親の年金などに依存する「パラサイト・シングル」になって、日本は少子高齢化という悪循環から抜け出せなくなっている。若者が「希望」を持ってない国に、未来があるのだろうか。「ALWAYS・三丁目の夕日」のように貧しくとも(夢)だけは、いっぱい持っていた敗戦直後に、ノスタルジーを感じるドラマが増えている。もちろん五〇年前後の若者は、貧しかったが、ピュアな(平等)感はもっていた。それに比べ現在の若者は、格差社会に絶望している

## 一 京都のハイカラさん

一九五〇年から京都暮らしを始めた作家の稲垣足穂は、京都の印象を次のように語っている(「ならびが丘」

一九五一年『足穂大全 第五卷』現代思潮社、一九七三年)。

京都は斬新なアイデアでは何時だって先輩格であった。琵琶湖の水をこちらえ誘導する…世界的大工事を明治の前半期にやっていたのけている。「舎密局」というのもハイカラだ。博覧会、動物園、電車、活動写真、軽気球、瓦斯燈、いずれも京都市によって先鞭が付けられた。萩田常三郎の飛行機、小劇場「エラン・ヴィタル」、京都二中のプラスチックバンド…思いつかべながら、夜の窓の向うの狐火が、自分に「銀河鉄道」のプラットフォームを連想させていることに、僕は気が付いた。

蛇足を加えれば、民間飛行家の先駆者萩田常三郎は滋賀県の出身であるが、同志社中学を中退して、若い頃に京都で呉服屋を経営している。それに彼が一九一五年、エンジン・トラブルで逝去したのは、京都の深草練兵所であった(稲垣足穂『ヒコキ野郎たち』新潮社、一九六九年、藤田洋他『それでも私は飛ぶ 翼の記憶一九〇九—一九四〇』オフィスHANS、二〇一三年)。

また小劇場「エラン・ヴィタル」というのは、劇場ではなくて、劇団の名前である。同劇団と東京踏路社創作劇場が、一九一九年一月、京都の岡崎公会堂で上演した、倉田百三原作の『出家とその弟子』は、日本の新劇史上画期をなす事件であった(大岡欽治「京都エラン・ヴィタル小劇場の歩ん

だ道』『日本演劇学会紀要』第一八号、一九七九年)。

京都生まれの私から見れば、この稲垣のモダン都市京都の礼賛論の裏側に、安岡章太郎の「京都の人の因習や伝統に縛りつけられた『重さ』」(『美的日本再発見』)で「この名月」世界文化社、一九九八年)、という言葉が被さってくる。中年になってからの二二年間、北海道の小樽や札幌で暮らしてみても、逆に京都の「奇妙な中華思想」(安岡前掲書)や排他性の強さがよくわかった。

その京都の戦後文化を語るうえで、忘れてはならないのが、戦前の学生の文化運動である。一九三〇年代半ばに、京都を中心に発行された雑誌『世界文化』や新聞『土曜日』は、反ファシズム運動として有名である。『世界文化』は、京都大学の美学の教授深田康算の全集(岩波書店、全四巻、一九三〇年)を編集するために集まった、中井正一を中心に、富岡益五郎、長広敏雄、辻部政太郎など若い学徒が始めた雑誌『美・批評』が出発点にある。

一九三三年に京大で瀧川事件が起こるが、その時に中井は文学部対策委員の中心となって活躍するが、久野収は学生代表、真下信一は大学院学生として活動した。しかし、瀧川事件の余波で『美・批評』は第二七号で休刊した。この『美・批評』を復刊させようとした中井らに、同志社大学の予科に就職していた真下を媒介に、新村猛、和田洋一ら同志社の教員が加わってくる。翌年三四年、第二次『美・批評』第二八号が再刊されるが、瀧川事件を経

過して、美学の同人雑誌から文化・思想の総合雑誌に変貌していった。

そこで雑誌の改組・改題が検討され、三五年二月に『世界文化』が創刊される。内容は、欧米の海外文化の紹介、報道を中心としたものである。しかし、ここでのイタリアやドイツのファシズム政権の誕生、フランスやスペインの人民戦線の紹介などは、大きな影響を与える。

『世界文化』は、インテリの情報誌であったが、三六年七月、『世界文化』の同人と京都松竹下加茂撮影所の大部屋俳優斎藤雷太郎が出会い、斎藤の『京都スタジオ通信』を改組して『土曜日』を刊行した。『土曜日』の巻頭言は、中井と能勢克男(弁護士)が交替で書いている。しかし、読者の投書を重視し、自由なコミュニケーション空間を創り、最終八〇〇部まで拡大している。広告主の喫茶店(フランソアが有名)が買い取り、コーヒー代に含めて客に無料で配布した。喫茶店の文化が、言論的な公共性を創ったことには、もっと注目すべきである。

この『世界文化』や『土曜日』も、三七年一月、中井、新村、真下が檢舉され、その後久野、斎藤、瀬津正志が檢舉されている。翌三八年には、和田、能勢、熊沢復六も檢舉される。主要な同人の檢舉によって、三七年に『世界文化』は第三四号で、『土曜日』は第四四号をもって発刊停止となる(山崎雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、二〇〇二年)。

迫り来るファシズムに対して、自由主義者とマルキストが共同戦線を組んだ運動として高い評価を受けている。

その『世界文化』の影響を受けて、三〇年代後半の京都には、京大の『学生評論』をはじめ、『京大作品』や『京大俳句』、同志社大の『同志社派』、龍谷大の『宗教と芸術』や『業火』、大谷大の『工房』や『平和』などの雑誌が生まれている。私は、高校時代から『宗教と芸術』を主催していた森龍吉の『親鸞』(三一新書)のファンであったから、六〇年代の後半、龍谷大学で森の『社会思想史』の講義を受けていたが、『世界文化』から学んだスベイン人民戦線の話が、自分の人生を変えた、と聞かされたことがある。

ここでは出版史との関係で、『同志社派』についてだけ触れる。三五年五月に同志社予科の『文芸芸』のグループと大学の『同志社文芸』のグループとが合同して、『同志社派』が創刊される。発足時の同人は、田畑弘・高洲正平・多谷泰三・筒井好雄・松井三郎ほかであるが、田畑・高洲・多谷らは社会主義リアリズムの創作を目指していた。その時に『世界文化』の同人で、同志社予科の教授でもあった新村猛、真下信一、和田洋一は、しばしば同人の合評会、読書会、座談会にも顔を見せて、同人誌にも執筆していた。

田畑の証言によると、同人は熱心に社会科学関係の書物を読み、やがて新島会館でマルクス・エンゲルス全集の第一巻の秘密読書会を持ったが、これはたぶん真下の熱心な指導力によるも

のだと語っている。また学外の同人誌『車輪』『リアル』『京都文学』などと交流し、学外からの同人参加や投稿を呼びかけたのは、反体制的な文化戦線を説いた新村の発言に刺激された、と語っている。

三六年の中頃から竹村一、<sup>バクオウシユン</sup> 宮田正平、浅井亮雄などの新メンバーが加わり、それまでのモダニズム的な文学作品が後退し、左翼的な作品が主流をしめ、映画批評や演劇批評が誌面をかざるようになる。竹村は、悪化する社会情勢のなかで、こうしたグループの左傾化は、これらの三教授の精神的な支援なしでは不可能であった、と語っている。例えば朴は、「文学はロマンチックな遊びではない。また少数の限られた選民の御用物でもない。文学は闘争だ。(中略)それ故に文学は常に民衆と共に呼吸すべきものである」といった戦闘的な文学宣言を行っている(第三巻第四号)。

しかし、浅井は日本共産主義者団の下部組織である瓜生保隆らのグループとの関係で、三八年に檢舉され、朴、宮田らも檢舉されるが、これは完全なフレームアップである。竹村は、「怠惰な左翼の文学青年の集まりで、サロン派マルキストの寄合世帯に過ぎないと当時を回顧している(郡定也「京都学生文化運動の問題」同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究一』みすず書房、一九六八年)。だが、この時期の同志社は、右翼学生の台頭といわゆる「同志社事件」(神棚事件、国体明徴論文拒否事件、上申書事件、チ



ヤベル籠城事件)などで、リベラリズムの解体が、急速にすすむ時期である(高道基「同志社の抵抗」前掲書一、一九六九年)。ファシズムへの最後の抵抗運動として見る必要があり、『同志社派』に集まった田畑、竹村、朴の三人が、戦後三一書房を立ち上げた意味を考えてみる必要がある。

## 二、戦後京都の出版社

戦前の京都では、二五社ほどしか出版社は無かったが、戦後は空襲も殆ど無かったおかげで、二〇五社ほどの出版社が出来る。ただ中小の出版社が多く、まともな社史もなく、その全貌をつかまえることが困難である。ミネルヴァ書房の杉田信夫が中心になって、『京都出版史(戦後編)』が、一九九一年に刊行されているが、占領軍が帰ったアメリカのプランゲ文庫の書物との照応がなされていないため、完璧な目録は未完成である。ここでは、『京都出版史』の空白を埋めるために、日本書籍出版協会京都支部が、二〇〇一年一〇月二八日に開いたギャラリートーク『わたしの戦後出版史』(社団法人日本書籍出版協会京都支部、二〇〇一年)や杉田の自伝『わたしの旅路』(ミネルヴァ書房、一九八三年)などを使って概観を見る。

戦後の京都は、他の大都市に比べても空襲が少なく、印刷の機器や資材も残っており、大学、専門学校の数も東京に次いで多く、読者や著者の層も厚かったので、出版に向いた土地であった。そこで二〇五社の出版社が出来るが、日本全体で一九四四年に三七四三社あった出版社が、戦時統制で二〇三社に減らされており、敗戦時の出版社は三〇〇社であった。四五年九月に統制団体である日本出版協会が解散させられ、一〇月に日本出版協会が創設されるが、それでも会員数は五六六社であった(能勢仁他編『昭和の出版が歩んだ道』出版メディアアール、二〇一三年)。ここからも京都の出版社の数がいかに多いかがわかる。杉田は、「出版ルネサンス」の時代だと言っている。

どんな出版社があったのかというところで、杉田はまず中市弘の甲文社をあげている。ここでは中谷吉郎の『寺田寅彦の追想』や『霜の花』などが出版されている。湯川秀樹の『原子と人間』や鈴木成高の『世界の運命と国家の運命』、佐々木惣一、高田保馬ら京大系の本以外に、柳田國男の『西は何方』や武者小路実篤の『湖畔の画商』なども出している。なかなか固い本を出していたが、経営に行き詰まって五〇年には消えている。中市は、戦前から甲鳥書林という出版社もやっており、そこから柳田國男の『野草雑記・野鳥雑記』や『湯川秀樹選集』などを出していたが、やはり経営が思わしくなく、六七年には甲鳥書林新社と改組してまもなく消えてしまった。

京都の出版社は、町の中心中京区に多く出来、そのなかに大手と言われる四社があった。全国書房は、御池の富小路西にあり、社長は田中秀吉という人物であった。岡田正三訳の『プラトン全集』、石川淳の著作集、『土田杏村全集』、単行本では谷崎潤一郎の『刺青』、『二月堂の夕』、志賀直哉の『蝸まれた友情』など。他に島尾敏雄、岸田劉生、沢瀉久孝、日夏耿之介、芹沢光治良、火野葦平、正宗白鳥、広津和郎、舟橋聖一などの文学者。学者では小林太市郎、浜田耕作、辰野隆、鈴木信太郎、久野健、江上波夫など錚々たるメンバーである。特筆すべきは、新村出編の『言林』(二四〇〇頁)を出版したことである。当時としては珍しい外来語や新語を入れた総合的辞典であり、『小言林』や『ポケット言林』も出したが、四九年には消えていった。

いう噂が立ち始めた。そこで全国の書店から日配への送金が滞り、四九年三月に閉鎖された。九月には東販、日販、大阪屋を始め、各地の取次店ができるが、それでも日配従業員二四五二名のうち七一五名は職を失った。

これは日本の出版業界全体に大きな打撃を与え、倒産する出版社も続出した。先述した京都の大手四社を始め、多くの出版社が倒産した。日本全国で一五〇〇前後の出版社が倒産して、生き残ったのは五〇〇社ぐらいだと言われている。

その後戦後の一〇年間で京都の出版社は、盛んな時の四分の一の六五社に激減した。杉田は、京都の出版社というだけで、書店からもっと利益率を上げてくれと言われたことがあると語っている。出版は、東京が一流、地方は二流という差別が激しい、とも語っている。情報収集や流通ルートの便利さから東京に移る出版社が多いが、地域の文化を大切にして、学術書、美術書、宗教書などに力を入れることを強調している。それにしても中央への一極集中がひどすぎる。

### 三、田村敬男と大雅堂

田村は、私が会った数少ない京都の出版人である。六〇年代の半ば、高校時代に田村が編集した、『山本宣治―白色テロは生きています』（室賀書店、一九六四年）という本を読んで、戦前、帝国議会で治安維持法の改悪に唯一人反対して、右翼のテロにあった山本宣

治という代議士に興味をもって、田村を訪ねたことがある。この時、田村は百万遍で昭和堂という印刷・出版社をやっていたが、無知な高校生に「内の息子の子どもの頃に、顔がそっくりだ」と優しくしてくれて、素朴な質問に親切に答えてくれた。田村とその周囲の人は、まめに記録を残してくれて、他人に自分のことを書かした『或る生きざまの軌跡』（正統、自費出版、一九八〇・八九年）や自伝『荊冠八〇年』（あすなろ、一九八七年）がある。田村と政経書院については細川光洋の「吉井勇の旅靴」（『短歌研究』六八巻第八号）など、個別的に触れた論攷はあるが、まだ本格的な研究はない。しかし、『荊冠八〇年』は出版史にとどまらず、京都の民衆運動史を知るためには必読の書である。ここでは出版史に関する部分だけ紹介する。

田村は、一九〇四年一月一八日、長野県東筑摩郡里山辺村新井で、父豊茂、母わきえの長男として生まれた。父は竹行李の工場をやっており、家は代々地主であったが、彼の幼少期はそう豊かではなかった。里山辺小学校高等科一年を卒業すると、日本銀行松本支店長の吉井伸助の書生になる。吉井が京都支店長に栄転すると、田村も京都について来て、書生をしながら夜は商工実修学校（四条中学の前身）に通う。しかし、吉井は大阪の加島銀行の常務取締役に就任する。加島銀行というのは、昨年度NHKの朝ドラで今世紀最高の視聴率を稼いだ「あさが来た」のヒロイン白岡あさのモデル広岡浅子

の経営する銀行である。

田村も加島銀行に就職するが、そこで土蔵の扉が倒れて大怪我をする。しかし、左右両足と右手の切断を免れ、必死のリハビリで杖をついて歩けるところまで回復した。ここで田村は、神の加護を感謝してクリスチャンになる。そして、京都転勤を契機に、立命館大学専門部法律科に籍をおいている。また丸太町新道の同朋教会が、滋賀県の膳所で開催した日曜学校教師養成所に入所し、賀川豊彦、杉山元治郎らの講義を聞いて、クリスチャンソシアリストになる。立命館でも非合法の社会科学研究会に入会し、後の南海電鉄会長の川勝傳ら七人とブハーリンの『史的唯物論』の読書会に参加する。チューターは、夜間部講師の四宮恭二らがあった。このサークルは、本来なら一九二五年に野呂栄太郎らが検挙された京都学連事件で弾圧されていたが、不思議ではなかったが、規模が小さかったので助かった。

田村は傷の具合が悪化して自殺も考えるが、思い直して京都俸給生活社組合（サラリーマンユニオン）に参加する。そして、加島銀行に公務で障がい者になったからと五〇〇〇〇円の賠償金を請求し、承諾してもらって退職した。その時に、労働農民党に入会し、河上肇の『貧乏物語』の発行社弘文堂書房の労働争議などを指導した。傍ら労働党教育部長として、左翼の雑誌やパンフレットを配布していた。

その頃、東京の出版社共生閣の藤岡淳吉と知り合い、同店の京都支店から

始まり、後には京都共生閣として独立した。店舗を河原町丸太町に移すと、特高警察の張り込みにあった。この時、島崎藤村の『新生』のモデルになった島崎こま子が、向かい側で長谷川プレスシング店を開いていて、特高が共生閣の張り込みに来ると、窓に白いハンカチを出して、そっと知らせてくれたそうである。共生閣は、京大前のナカニシヤを始め、彦根、大阪、神戸、姫路から上海の内山書店にまで、非合法の機関誌『戦旗』などを配布していた。

商売が軌道に乗ると、社会科学書の出版に乗り出し、最初、メーデーの話や太田武夫（後、典礼）のソビエト医学に関するもの、太田遼一郎・斎藤英三の短歌集『獄中にて歌える』などを出版している。一九三三年の京大瀧川事件の時には、『京大問題の真相』という緊急パンフレットを発刊し、二万冊が飛ぶように売れた。翌三四年から社名を政経書院と改め、合資会社組織として学術書の出版を始めた。蜷川虎三の『漁村の更正と漁村の指導』や成瀬無極、太宰施門らの文芸書も刊行している。

しかし、政経書院の出版物を一手販売していた京都書籍株式会社の倒産によって、受取手形九万五〇〇〇円が不渡りとなる大打撃を受ける。この危機を、東本願寺の大谷句仏上人の還暦記念句集の刊行で乗り切った。一冊一〇〇円で、三三〇冊の限定出版とした。そこで政経書院の経営を打ち切った。そこで政経書院の経営を打ち切った。東京の友人藤岡淳吉のやっていた日本青年教育会の教科書出版をするこ



とにした。宝文館を一手取扱店として社長に就任した。三重県の郷土史や農業教科書の一切を取り扱った。採算性も高く、社屋も河原町二条から河原町広小路下ルに移し、社員も飯田助左衛門ら三人を新たに雇った。しかし、この時藤岡の頼みで、助川啓四郎や船田中のやっていた東亜同志会のパンフレット一〇点を、代表名義人として発行してしまった。これが戦後、「戦犯」として追放になる、最大の理由であった。

この頃、青年教育会出版部も途中で辞して、政経書院を改組して、教育図書株式会社を設立する。社屋も河原町四条上ル、坂本龍馬遭難の家を買取り移っている。また、京都出版協会の三代目理事に就任している。そのためもあって、戦争末期の企業整備委員に任命され、一四の出版社を合併して、四三年に大雅堂を設立した。社屋は三条烏丸東入ル、今の京都銀行三条支店のあるところに総合書店として発足した。田村は、出版社の企業整備ばかりでなく印刷所の整備や用紙の統制にも奔走した。

戦後、田村は「昭和初期天皇制支配下の特高警察に追われながら、帝国主義戦争反対を心から叫びつつ闘った苦しかった日々を思い出す時、戦争中の自分のとった行動を省みて、その矛盾に全く激しい自己嫌悪に陥り、「失意と矛盾の交錯の果てに『死』を考えたいこともある」と語っている。しかし、戦後の大雅堂は、四六年一月から元読売新聞の嬉野満州雄を編集長に、杉田莊作雑誌課長と三名の女性社員と

で『時論』という総合雑誌を発刊している。関西では珍しい評論雑誌であった。田村は、大雅堂の出版用紙横流し事件の責任をとって大雅堂を辞任するが、GHQから大雅堂は公職機関に指定され、田村は公職追放になる。関西の出版界で公職追放になったのは、田村と立命館出版部の富田正二の二人だけだった。大雅堂は、会社の土地・建物を京都銀行に売却して、和田忠次郎が社長になり、実用書を出版していたが、間もなく廃業になった。

田村は、辞職後、日本科学社を立ち上げ、民主主義科学者協会の山内年彦らと『学生叢書』(文庫判)を発刊している。四六年九月の「発刊の辞」には、「我々は今日こそ一切を擲って民主主義革命の真只中に投じ、そこから学問の独立と人間性の尊厳を戦い取る」という当時の激しい雰囲気を感じさせる言葉が書かれている。当初の計画では、自然科学・技術四五冊、経済学・哲学宗教・文学芸術各一五冊、政治法律・社会科学・歴史学各一〇冊、合計一二〇冊が予定されていた。初期に刊行されたものは、中井宗太郎『絵画論』、森龍吉『日本仏教論』、重沢俊郎『中国四大思想』、菅原仰『相対性理論』、高橋松蔵『免疫現象化学療法』、北川鉄男『映画社会史』、相沢秀一『経済原論』、原光雄『自然弁証法』、浅井清信『私法學原理』、星野元豊『宗教哲学』、船山信一『日本科学者の弁証法』、沼田稲次郎『日本労働法論』、宇尾井久『農政史論』、徳田御稔『生物進化論』、稲岡進『農民運動史』ほかがある。筆者には学生

時代にノートを取りながら読んだ、懐かしい本もある。田村は、戦後、国民救援会に入り、公安条例廃止期成同盟、松川事件被告救援、京都解放運動戦士の碑の建立、山宣会の活動など、京都の民主運動の先頭に立った。晩年は京都ライトハウスの館長になり、山本覚馬の発掘などにも尽力し、一九八六年一月二〇日に八二年の生涯を終えた。彼を慕う人は多く、そのおかげで記録が残った。

#### 四、三一書房と『人間の条件』

先述したように戦時中の同志社で、『同志社派』という同人誌に集まった、田畑弘、竹村一、朴元俊の三人が三一書房を創る。最初、大雅堂の編集部長が田畑で、竹村はその下で編集部次長をやっていた。戦後、二人は独立を考えて、一九四五年に退職金代わりに本の用紙を買って、大雅堂を飛び出した。その時に、百万遍の交差点から西北の方角に向かうと、西園寺の別邸に行く小さな道があったが、そこで三一書店という古本屋を朴がやっていた。

三一というのは、朴が朝鮮の三一独立運動にちなんでつけた名前であるが、朴自身も『民主朝鮮』に金達寿らと並んで小説を書くようなインテリ文学者であった。そこで田畑らは三一書店をまるごと買い取って、朴と一緒に三一書房を始めた。トレーズの『人民の子』やジョン・リードの『世界を震撼させた十日間』などの本を出して、結構売れていた。特に河上肇の『第二貧乏物語』

などは、初期のベストセラーであった。ただ当時は、書店が整備されていなかったため、直接郵便振込や為替で注文が来たそうである。三一書房というと左翼出版というイメージがあるが、同志社の人脈があって、新村猛やその友人の久野収がよく来て、喧々諤々の論争を六畳と三畳の二間しかない事務所でたたかわせていた。二人は京都人文書園の教師でもあった。竹村は、四八年から東京に行って、自宅を東京事務所にして編集活動を始めた。田畑は、ミネルヴァ書房の杉田や大雅堂から同志社大学出版部に移った杉田莊作らと計って、金芳堂、法律文化社、有斐閣京都支店の人たちと毎週土曜日に集まる「土曜会」を創った。ここでは共同の出版目録を作ったり、一緒に旅行したりした。東京に行った竹村も、大月書店や理論社などの左翼出版社と「木曜会」という集まりを持っていた。そこで理論社の小宮山量平社長と出会って、五味川純平の『人間の条件』という総計二〇〇万部は超えたという大ベストセラーを出版するきっかけを掴んだ。

五味川純平(栗田茂)は、旧「満州」で生まれ、東京商科大学(現一橋大学)に入学するも一年で退学し、東京外国語学校(現東京外国語大学)の英文学科を卒業して、「満州」鞍山の昭和製鋼所に入社する。ここで後の東大教授隅谷三喜男と知り合うが、そこから『人間の条件』の主人公梶のモデルは、隅谷ではないかという推測が生まれるが、五味川は「梶の九割はフィクションだ」

と語っている。五味川の「満州」時代の友人に田畑シゲシ（共産党京都府委員会副委員長）などがいた（西口克己談）。そして四三年に召集され、四五年八月のソ連軍の「満州」侵攻の時には、所属部隊は全滅に近い打撃を受け、生き残ったのは五味川ら数名であった。四七年に引き揚げるが、生活をやす恵夫人のミシンの内職に頼って、電話もない四畳半二間のアパートで、自分の戦争体験をもとに『人間の条件』を執筆した。

一九五六年春までに『人間の条件』は、九〇〇枚に達した。単行本二冊の分量であったが、もちろん出版のあてはなかった。ある日、友人で劇団民芸の演出助手の早川昭二に、『人間の条件』の主題を話した。興味をもった早川は、原稿を読んで感動し、知人の理論社的小宮山の所に原稿を持ち込んだ。しかし、小宮山の所には、無名の人びとの何百枚という長編作品が、いつも二〇篇、三〇篇と持ち込まれていた。小宮山は、毎日自宅でも原稿を読み、午前三時以前には就寝したことはない生活をしてきた。そのなかでも小宮山は五味川の原稿を読んだが、理論社では「近日中に出版できない」として、三一書房の竹村に話をまわした。

竹村は、『人間の条件』のナマ原稿を見て、まず驚いた。分厚い原稿用紙のどの頁にも一字の訂正、書き込みもなかったのである。「僕の今日に至るまでの三十五年の出版生活で、あんな原稿を見たことはじめてだね……『廓』の西口克己の原稿も、書き込みも削除

もない綺麗な原稿だが、彼の場合は訂正個所のマス目に、一字の大きな紙を切って貼り付ける。しかし、五味川君は、一字一句の直しもなく、はじめの頁から終わりまで、どの字も変わりなく正確な書体で書かれていてね」と語っている。五味川の熱情にうたれたのである。

竹村は、躊躇なく五味川に、「ヨロコシデ シユツパンスル シキウアイタイ」という電報を打った。竹村は、赤字の三一書房は、『人間の条件』と心中してもよいと思つたと言っているが、その冒険心を支えたのは、戦争体験であったとも語っている。同志社時代、唯理論研究会に加わり、反戦学生運動をしたため検挙され、拷問につぐ拷問。擲手からの泣き落としなどにより、心ならずも転向」をした。そして、「反抗的でまったく無頼の兵として通した二年間を回想しつつ、たとえどんな兵であったとしても（侵略戦争に行った負い目はいままもある）と苦渋に充ちた言葉の口にする。その負い目が、戦後一貫しての反権力・反体制で筋を通した生き方の「核」となり、三一書房を、天皇制、朝鮮、部落の三本柱の反権力志向にしている理由である」と語っている。「竹村は、社会の底辺に差別を受けて生きる善良な民衆に、温かい人間性を感じ、逆に天皇を頂点とする権力機関の威圧性、強迫性、暴力性、欺瞞性、あるいは、正義はいつもお上にあるという傲慢性に、許し難い堪忍のならない気持ちを抱いていたのだ」と言っている。それが彼の出版活動の信念であった。（塩澤

実信『戦後出版史』論創社、二〇一〇年）。その三一書房が、一九九八年一月に、本社をロククアウトし、組合員全員を不当解雇し、二〇〇五年まで裁判するという労働争議を起こしたことを、田畑、竹村、村らの創業者たちは、どう思ったであろうか。

### おわりに

戦後京都の出版文化のなかには、リベラリズムやマルクス主義の反権力・反体制の伝統が流れていた。京都には、戦争の失敗に学び、高い志を持ち、著者とも考えてくれる優秀な出版人がたくさんいた。今こそその歴史を掘り起こしていくことが大事だと痛感する。

私の専攻した歴史学の分野でも、林屋辰三郎は早くから『歌舞伎以前』（岩波新書）のなかで、戦前の中央の歴史に対して地方の歴史。貴族や武士の歴史に対して民衆、とりわけ被差別民の歴史。男性を中心にした歴史に対して女性の歴史を描くことを強調している。ところが現在の世界では、「トランプ現象」やヘイトスピーチが蔓延している。一昨年、濟州島で聞き取りをした時に、「在日」で大阪から移住してきたという女性から、「こんなに自由に暮らせて有難い。日本にいた時は、本当に息苦しかった。『朝鮮人は死ぬ』などというデモの声を、『在日』の子ども達はどうな思いで聞いているか、その気持ちかわかりますか」と言われて、まともに答えられなかった。

今年の九月二六日には、衆議院の本

会議で、安倍首相が所信表明演説で、自衛隊員などへの敬意を示そうと呼びかけると、自民党の議員が一斉に立ち上がり、約二〇秒間拍手をするという場面があった。自衛隊や警察を「暴力装置」と言うのさえはばかれるような風潮があるが、先日の沖繩県東村の高江地区のヘリパット建設での機動隊（大阪府警）の反対派住民への「土人」「シナ人」発言を聞いていると、彼らの危険な役割がよくわかる。それをまた菅義偉官房長官でさえ遺憾だと表明しているのに、松井一郎大阪府知事が、「御苦労さん」と発言して、機動隊員を慰労するというのは、異常としか言えない。

私は、戦後京都の出版文化のなかで学び、早くから（弱者）によりそい、反権力の歴史学を目指すことをこころがけてきた。東京とは違う歴史学や文化が京都にはあると考えている。それを支えているのが出版文化である。ところがその出版文化が、今日大変な危機に直面している。大学も運営交付金を削られ、産学共同どころか軍学の共同も常態化してきている。歯止めのかない右傾化で、歴史はもう一度過ちをくりかえそうとしているのだろうか。

（付記）本稿は、二〇一六年一月三日に第四〇回京都市で講演した内容である。